

## ジュゴンの食み跡の定義について

海域調査で確認されたジュゴンの食み跡と思われる痕跡については、これまでの海外での研究報告事例（Preen,1992., Shwky, 2019）などを参考に、食み跡か否かの判断基準を定義し記録している。ジュゴンの食み跡の定義を表1に記す。

事業では、2つのタイプの食み跡について、それぞれの定義全てを満たすものを食み跡の可能性のある痕跡として記録している。

表1 ジュゴンの食み跡の定義

食み跡の形状	定義
線状の食み跡	・幅が 15-30cm
	・地下茎まで摂食されている。(底質が掘り起こされ、地下茎もしくは地下茎の一部が摂食されている)。
食み跡密集域	・地下茎まで摂食されている。(底質が掘り起こされ、地下茎もしくは地下茎の一部が摂食されている)。
	・密集域の外縁や周辺に線状の食み跡が見られる。
	・密集域内に、食べ残された線状の海草の束が見られる。

線状の食み跡については、幅（ジュゴンの顔面盤に相当）が 15-30cm で、地下茎まで摂食されている（底質が掘り起こされ、地下茎もしくは地下茎の一部が摂食されている）ものを食み跡として記録している（図1）。

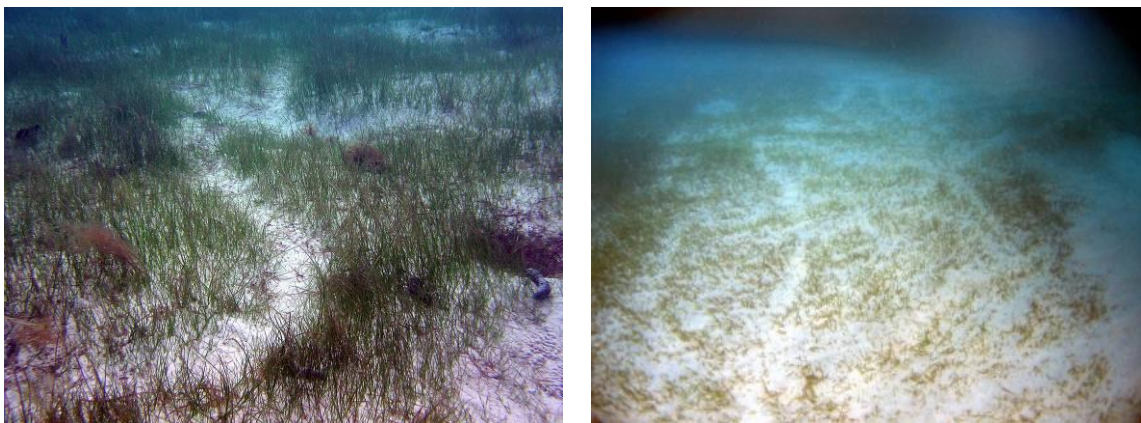


図1 線状の食み跡（feeding trails）

一方、沖縄県内では、これまでジュゴンの線状の食み跡周辺で多数の食み跡によって形成された食み跡密集域と呼ばれるジュゴンが海草を集中的に食べた痕跡が見つかっている（環境省、2003）。食み跡密集域に関しては、密集域の外縁や周辺に、線状の食み跡が分布していることが多い。

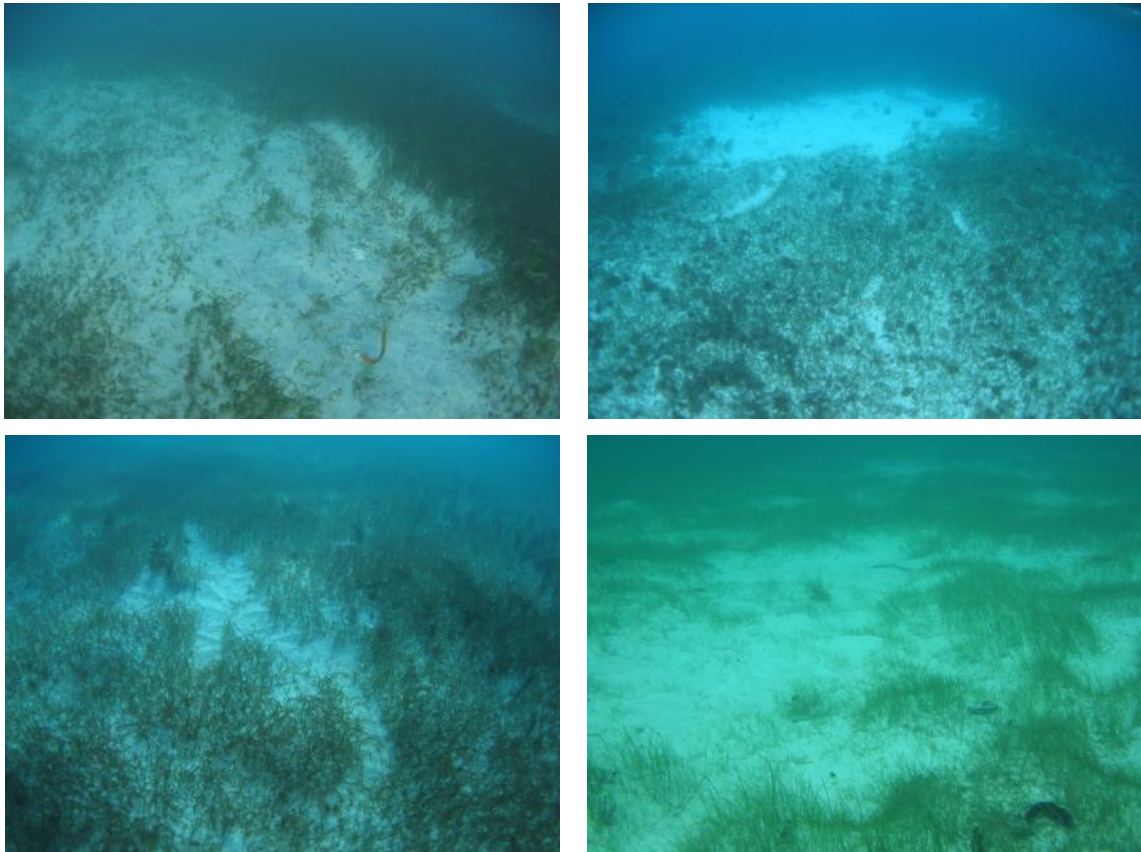


図2 食み跡密集域の状況

【アオウミガメの食み跡との識別点】

ジュゴンのように海草類を摂食する大型動物として、アオウミガメがあげられる。アオウミガメの食み跡に関しては、中西の報告にあるように、リュウキュウスガモなどの大型海草類の食み跡は、葉が直線的に切断されること、また地下茎まで食べた場合には最大径が7-23cmのすり鉢状の形状を有する(中西、2009)。

ジュゴンは、基本的には線状の食み跡となることから(「密集域」は線状の食み跡の集合体である)、野外調査で地上部のみ摂餌されている食み跡、地上部の葉の切断面が直線的なもの、すり鉢状の小型の食み跡(図3)に関しては、アオウミガメの食み跡と定義し、ジュゴンの食み跡と区別している。



図3 アオウミガメの摂餌（摂餌している海草類はリュウキュウスガモなど）  
※頭部の先端部分の裸地がすり鉢状の食み跡

参考文献

Preen, A. R. (1992) Interactions between dugongs and seagrasses in a subtropical environment. PhD thesis, James Cook University.

Shwky, A. M. (2019) Evidence of the occurrence of a large dugong in the Red Sea, Egypt. Egyptian Journal of Aquatic Research. 45: 247-250.

中西喜栄（2009）石垣島の海草藻場で確認されたアオウミガメの食み跡. 沖縄生物学会誌. 47 : 19-23.